

朱朋会ニエス

第 2 号

発行日：1960年10月23日
 編 集：東大医学部衛生看護学科
 朱朋会編集委員会
 発 行：朱朋会

第2回 合同実習をかえりみて

一つの大きな行事となった合同実習をふりかえつてみて、実習に関係した各方面の人々の意見や感想をまとめてみると、従看がどの様に解釈され、受け入れられているかが皆かびよつてきた。従看が、こんな良にも存在しているのだということを一。

合同実習とは

3年と4年の学生を組み合わせ、3～4人の患者を接待し、内科と外科で一週間ずつ実習した。

四年生の実習目的は、内科及び外科の専門的な知識を深め、疾病面、精神面、社会面を含む患者の総合的な管理計画を立て、それを実施、評価する力を養うこと。三年生の目的は、基礎的な観察法を学び、臨床看護の一般技術を習得すること。医師患者の管理を行うこと、というのであつたが、実際は三年と四年のはつきりした区別はなかつた。

臨床看護、基礎看護の共同實社に於て理解され、内科、外科の先生、医局の先生、看護婦さん達の熱心な援助のもとに実習が行われたのである。

三年生の発言

「今まで天の上にあつたものが、急に地上にひきおろされた。この事は3年生にとつて非常に飛躍だつたと思います……」実習関係者全員をあつめての検討会の時、ある3年生がこう言った。この発言は、3年生全体の気持ちを正確なく表現したものと云

えよう。合同実習のありかたについて、いろいろな意見のあるのは勿論だが、しかし私たちが3年にこつては、初の至験から見た「現実の重み」をいかにしてか折り、断りしていくかということが、残された最大の向題となつた。

《患者と接することの難しさ》

たずねてもイエスかノーしか答えてくれない患者と話をスムーズに進めようとするこの苦しさ、又患者の *intellect ignorance* と性格と病状等々を考えながら話な自分の返つ方向にもつていくこのいかにむずかしいことか！

《現行看護制度への疑問》

完全看護ということはを廃止して基準看護と改めたゆえんが良くわかる。つまり完全でないからだ。行われていることの不完全さに対する弁解を常に制度や技術にもつていくことには不満足だが、それにしてもあれ程の多忙な勤務の中で理想の看護を行ふのは不可能に近いとさえ言える。医療従業者の責力を病床と同時に病院救護に向けるとほしいと思う、

《無視されている患者の心》

病向をつぶす最大の手段は週刊紙をよむ事、すべての患者のために、何か左のし

を考へてあげられないものだろうか、見込のない患者に対しては尚更のこと、検査や治療や処置の実際の場合においても「患者が人間であることを」と考へる必要がある、心をもつた人間なのだということを、

「実習に課せられた課題の大きさ」あまりに課題が大きすぎた、はじめは小さくても良いのではないかと、という意見がある、いやその必要はない、実習はむしろ、同僚規定の場、考へるChanceを与えるものとして受けとればよい、それが最大の意義だという人もいる、誰も最初のうちは何が何やら少しもわからなかつた、実習の途中、プリントの「実習の目的」をよみなおした人だつて少なくない、今は、上の二つの意見に落ちついたようである、

「看護とは何か」

実習をしているとき「看護とは何ぞや」ということがもつともわからなかつたような気がする、それは今も残っているのだが、*Doctor* と *Nurse* の仕事の分割はどこにあるのか、*Nurse* の主体性というものが果してあり得るだろうか、そう感じた人が少なくない、

「私たちの立場—現実の社会の中で—」実習において私たちの果したのは *Doctor* と *Nurse* の中間の役割であつたと思う、これは二者の平均値ではなく、むしろその中間に致されていたもの、立脚点とした立場といつてよいのだが、この中間の立場にこそ、私たちの生きるとしがあり、とある人はいふ、しかし、中間的立場など実際にはあり得ない、もし、理想の医療体系をめざすなら、科学的方法論と人間学(?)とを身につけた *Nurse* として生きるべきではなからうか、と考へる人もいる、

「健康管理」

たとえ入院患者に退院後の生活の指導をしたとしても、それだけではいかにも不十分だ、特に一生 *Convalesced* の必要を患者に押しつけてその後の生活環境に於いての弾力性ある指導は、入院中のみでは果せないからだ、訪問看護婦とか、管理にあたる専任医師とか、更には、妊娠、予防活動を行う機関とか、そういう具体的な考慮が一日も早く実現されなくてはならない、その意味で、分院内の健康相談室に対する関心は着実に高まつた、

「医学の限界」

これほど人の命とこの世について、深く考へさせられたことはなかつた、と多くの人が言う、治療法の進歩を精進にのぞむものである、

「実習の形態とその内容について」

こんどの実習によつて、臨床医学的知識がぐんと増したか、といわれても、否はまちまちだと思ふ、しかし、今後の知識の広めに、實に多くの刺激が与えられた、という感想は一般に持っている、ノリノリの至極した内容も、床にさまざまであつた、それは対象とする患者により、チームを作る上級生により、指導を授ける先生により異なつてくるからである、個人差は致し方ないが、あまり教えて下さらない先生にたいしては、悲しかったという、しかし大気憤懣激した散下つて下さつた先生が数多く聞かされて、4年生から、3年生とのチームは負担が重たつたという声が多く聞かされて、それに対して先生からは同情する向きもある一方、驚きと失望の声があがっているのもたしかだ、その他の点では、症例発表とレポートのための実習という趣があつたという不満が多い、つまり、制約を与えられることなくと自由になつたか、という、

又、実習期間についても、もつと長くやりたいというものが、半日ずつにしてほしいというものなどがある、私達にとつては、すべてがあたりなくすべてが勉強を要するものであつたため五席六席(時間は八時九時)までも実習にとられてしまつては自分の勉強の方が追いつかないし、疲れもはげしいというところにその理由があるようだ、

先生の発言

小林先生(内科)

合同実習は去年はじめて計画したもので分院の先生も学生も非常ないきさつがあり先ず成功した、今年も去年の基礎があり全体としてスムーズにいった、どうやら今年は、迎撃の本質にもとつて *Case* を扱うようになつたのだが、あまりにもにぎさつた先生の方の照の入れ方が取つたかもしれない、取つたという点だが、先生としては診断学的—医学的的なものの方が残えいいから、しかしまあ、迎撃本来の使命を達成するため、ずいぶん果敢してやつてみた、三年生は少し辛かつたが四年生はよかつた、しかし、こちらの期待と違ひ、四年生では個人によつては指導性を課せられたのを強く意識しすぎたため、負担が重かつたようだ、全体としてはうまくいった、来年はもっとうまくできるよう計画したい、

林田先生(外科)

昨年始めて合同実習を行った時の目的は主として、集中的に医師の診断学をやる、しまおうという事だつたと記憶している、しかし今年には診断学を内科で教えたため、少し意識が曇つてきたような気がする、私が今度感じさせた意識としては、定められた患者を受持ち、責任を持つ

て管理すること、

- 2、多くの入方を各方面(医師、医局、迎撃、看護、看護婦)から動員し、密接な関係のもとに、実習が行われたこと、
- 3、三年と四年が、一語になつて実習することによる多くの効果、
- 4、ふつたの実習では得られなかつた、大きなテーマを感得出来たこと、(例、栄養管理、水介代謝の管理、退院後の生活指導、痛の統計的考察、予防医学の問題等々)、

勿論、年を産ると共に、一層「合同上の持つ価値をだせるようにしたいものである、そのためには、カリキュラムをより適切に組みかえること(例、栄養学・麻酔学の時期について等)や、その世の負担(例、公衆衛生レポート提出や夜勤実習レポート提出の期間が、実習期間と重なつていたこと等)を軽減して実習に集中出来るようにする事、四年生が、三年生の指導を重視に思つたら、医局や看護の先生、看護婦さんにも頼めばよい、等が考へられる、

理想としては、迎撃の終末の目的、広い意味の看護として、今迄と違つた社会連体性のある病院組織(医師と看護婦と迎撃的立場とが結びついている)に向つての合同実習でありたい、きいかえるなら、予防医学又は社会医学又は厚生医学的な体系の一環としての病院の在り方も合わせ考へながら、迎撃の実習を更に有意義なものにしていくよう期待する、

堀根先生(基礎看護)

合同実習ができるようになったの一番嬉しいと思つて居るのは、この私かもしれませんが、大層で行われる実習というものを何とか養育せしめようと思つた、各方面で

検討を重ねていたのですが、去年小林先生がいらして、全く画期的な実観を見たものです。みんなが心を合わせて、これ程多くの人に服カしていただける実観は、アメリカだつてあまりないでしょう。これをどうまゝ育てて、合同実習だけでなく他の実習にもその成果をのびせていきたいと思ひます。

＜電田先生＞ (基礎看護)

去年と比べて、症例報告レポートをかても、カルテ写しや医師の教本とくついついている傾向を認め、反省らしいものを出さそうとする努力があらわれました。全体としては、去年に比較してよかつたと思ひます。これは五年生の間に産業があり、その上へのつみ重ねが、私たち指導のものへの模倣という形で行われたからだと思います。実際の場におけるカルテ内の討論にも、反省らしい方向があつたと思ひます。別に苦勞はありませんでした。こちらの意図や努力が、学生の側に充分反映しないというもどかしさがありました。そのためにも、実習に関係する人全部が、実習の *Planing* に参加してほしいと思ひます。

＜堀口先生＞ (臨床看護)

私達(一期生)の頃は、合同実習というものはなく、実習といつても反省の先生達のみによつて行われました。それに比較して、今の病院側や医局が役カしてくださる合同実習はとても良いと思ひます。

勿論、これで充分だといふのではなく、クルス入、検討会、症例発表などに限つてこれからもつと工夫してゆきたいと思ひます。

＜花井先生＞ (外科)

何だかよくわかりませんでしたね。(私たちの実習の内容がどうか?) ええ。(どういふこと、説明されてなかつたんですか?) いいえ、一応話されてりましたけれどね。とにかくぼくらとあなた方は向題の持ち方が違つていふ、ぼくらは治療、つまり手術などか、主に対象となるわけですよ、ところがあなた方は看護ですよ、ずつと患者の側についている。患者の中には家へ帰つても思はれた環境に入れない人もいます。そういう人達にも、いろいろ面倒を見てあげる。非常にほほえましいと思ひましたね、外実実習なんかは、一人の患者を看護でとり囲むので、気の毒な気がするんですが、こんどの病室実習は、非常にほほえましいと思ひました。

＜長田先生＞ (内科)

くまずわるい点から
1) 短期間の中であれだけのものをせしよというのは無理だ。それに短期間にしてはスケジュールがととのつていない、*Nurse* のやることの実習と *Doctor* のやることの実習をわけるといふこと。

2) 人数が少なすぎる。あなたに多量には単なる説明に委ねられてしまつて *Practical* なることを教えてあげられない。
3) 臨床検査など、あなた方が卒業してやらされそうなることを、一応 *material* をまとめてやつておくのがよいのではないかと。

＜よいん＞

1) 3年と4年のコンビは非常にいいと思ひますね。
2) 熱心に、非常によく働いていた。しかし医学的興味がつよくて、看護の興味があ

けているのではないかと、といふ気がした。

特別な検査を記載するより、知識の得カを知らばよいのだ。患者の過去、現在、未来をあらゆる面を把握するのがいい、医学的知識はそれの一部にすぎないのだから、学生である以上、こまかいことを覚えるより、ものの考え方、精神力をみちり身につけてほしい。

看護スタッフの発言

＜相原病長＞ (内科)

医局や処置の先生の指導もよく学生も熱心で、非常にいい実習ができたと思ひます。しかし、実際の看護にあつては、看護ののびつぎや仕事をどうこわりなく行うためにも、もつと臨床検査計画や連絡が重要だつたと思ひます。こちらとしては、実際に患者を扱つていふのですから、受け入れ側の誤算はあつたと反省して、います。30人もの学生が同時に実習するとかどんな準備になるか、予備が不十分だつたので、材料などの準備不足がありました。

＜杉井部長＞ (外科)

昨年より、前の打ち合わせが出来ていたし、実習する間も受け入れ側も良くなつたと思ひます。学生の態度も良くなつてきましたね。臨床の先生や看護婦の側では、学生の勉強のために出来るだけの便宜をはかるよう努力したのですから、学生の方でもそれだけ実習に集中してほしいと思ひます。学生側から文句が出来たのはがっかりしました。もつといふいろいろしてあげたかつたのですが、忙しい反省の先生もいろいろなので私は準備と監督しか出来ませんでした。今で充分とは思ひませんが、何事も一

度には良くありませんし、実習が終つてからも、したい事があつたらしくつしやい。

＜内科看護婦Aさん＞

症例発表会によつと出席しましたが、短い期間によくまとめていひつしやると思ひました。私たち、患者につきつきりいいるのですが、個性になるといひわけでもありませんが、忙いこともあり、反省する時間がないのです。反省する時間があれば、もつといひ仕事ができると思ひます。思つただけです、私たちのつかひのことやあなた方に学ばされたことでもあります。(迷惑かけたことはなかつたか)の項に対してどうですかね、迷惑といふ程ではありませんが、カルテを分たいたつても、どこに持ち出されたかわからなくて困つたことがありました。

＜看護婦Aさん＞ (外科)

実習に当つたのは初めてですが、皆さん随分熱心に一生懸命にいらつしやいました。一週間では短かすぎて、充分にすべての事に当つてみられなかつたのではないのでしょうか。もつと長ければね。

患者さんの発言

＜患者B氏＞ (男57才)

いろいろと説明してもらいましたが、私からいろいろいふ留せてよかつたです。病室やその他、随分親切にしてもらいました。こんなにしてもらつたのは生まれてはじめてです。

＜患者C氏に附添うC夫人＞

看護の方選には、親切にしてくださいありがとうございますと思つてますし、良かったです。

は、

〈愚者D氏〉 (男、49才)
 非常に心算が正確で、親切にしてくれた。その反面、注射が下手で何度も針を入れ直りしていい看護は出来なかつた。そういうことはある。しかしヤッぱりね、病室と廊下をこころは、人が来てどうですかいいかがですかと言われると非常に気持ちいいものだ。自分の悲しいことや辛いことを打ちあけるとはじめて気持ちになるものだからね、一日に五回も六回も来られても、ちつとも迷惑ひやさない。好意を持っています。

〈愚者E氏〉 (男、27才)
 我々愚者の思っていることを代弁して述べてくれているのだという感じがわかった。あなたの方が来ている途中はわからなかつたが、彼で先生に話されてわかつた。これが一番いいことだと思う。それから、看護さんより親切に扱ってくれた。愚者の気持ちをよく聞いてくれた。カマけてくれる気が多かつたのはよかつた。その気、患者に対して効果があつたと思う。狂者の人達が出来てくつかりした人が多い、よくなかつた。と思つては別にないね。

35年度 朱明会 総会 ひらく

5月の末の予定で計画され、案内状もがズトの口にのまれてから、急に計画はつづれ、秋へ延期となつた。その至道は追つてもう少し詳しくのべるとして、秋となつて又新しく病室が計画され、一度次のように決つた。

月日 / 960年 / 11月4日
 時間 / 19時
 場所 / 山上会談所
 会ひ / 100名
 テーマとして、今年は何も決めないことになつた。というのには一期生から発言時間を1人5分程度欲しいとの要望があつたので、一期生に話の口火をうつてもらいたい。後は次々と話題が展開していき、みんなの話が一本になつていくだろうと期待しているからである。

5月の予定が秋に延期されたことに対して、不慮の念を抱いた人は少くなかつた。秋への延期を異業として感得した学友側の説明を並べてみると、次のようになる。

1. 梅さんがこゝろなつた途中である、世の中は賑繁としているし、朱明会のような人のなさな事をなすには時期としてふさわしくないだろう。

2. 土曜日に、又デモでもあつたら(その可推定は充分にあると思つた)出席率が悪くなるのではないかと、

3. 山上会談所に入者が多く集まると、二人心算時期だから、看護大学の側もあり(字因のさる集会に新聞記者のリムンできたという)質問されるかもしれない。他の場所ならいいが。

これに対し、学生側には疑問や不満が多く、5月にはという声が高かつた。委員の人達は、山上会談所以外の場所を探しておたししたらしいが、結局サツシリしないままに、総会は秋に延期という通告が簡単に出来た。そしてこの問題は終りになつたのである。



生協分売店誕生に際して

一杉 本 恵 美 子

パン、学用品がいかになら安く手に入れることができるか、これは私達にとって実に切実な問題だ。それなのに去年の全学生協評議員選挙でクラスで選出する時みんなどういふ美意のつもりか知らぬいばお互いに辞退しあつて仲々決らなかつたものである。そこで私が敢えてかつて、その頃は大いにフライングを懸けていた振りであるが決定か何にもしてないようだ。

初めての集りは11月頃だったけれど、当時の三年生の集意にその時分感でせられた。赤腕中にアソケートを出したり、赤腕長と押し向きをくり返したり、その度にあっさりつっぱねられる、こういうことにはあきらめずにはやり返していった。

一番の難点は協会の問題を政敵連のさる生協とはアカの集りを考えていて、学生協会の利用を先首せぬといふ、学生委員の先生はよく理解してしてくれたが、理事事務長に始まつて先生方の考えのおかげで、形式重んじ主義には本意にあきらめた。

何度も集つていろいろと出張販売

という事で、諸は具体的にまつて来た。生協制が実に悪心のか腕制、学友側と何度も交渉を重ね、1学友協評議員選挙で申請書、分売部長というふうな書面を提出してくれた。分売部長の意見は関係下種分手を聞いたらしい、又に再同じ組合員には平等の幸福をという精神をわめたことだからちとと利益は見込んでいるわけではないという事で、その誠意には頭が下がった。

学生協評にはしやられたシヨーカーズクラブ、注文用による1問の出張販売というはまだ不慣れなものではあるが、必ず大きなものに発展していくものと思う。

劇場に入学した時は、立派な生徒がすであつた、そして私達は半強制的に組合員になつて来た、今こうしてさうやがちな生徒の誕生がある、何とも言えない嬉しい事だ。本心に私達の生徒、私達が守り育てていかなくはならない生徒という実感があふ、大いに暖かして大切に育て上げて行くことではありませんか。

定例学生大会へむけて

― 自治委員報告 ―

はげしい安眠斗争が、岸内問題をおしアインクの日を阻止し、実質上案制をほとんど堅文たせるといふ結果をあげて一段落したまゝ、私達学生は身体を迎えました。一部の人はその成果をひきつゝさる、運動に発展させましたが、定例全体としての活動は九月にまつて再開されました。定例自治委員がとりくんでいるのは、定例学生大会のための試案を作成することで、ほんとうは、今期のはじめがすなわち

月に開かれるべき定例学生大会のさるが、期未知のとおり当時「安眠斗争の真意中、6/15で委員長候補という事案のため、7月になつても開くことができず、それを待たず今日まで延期されてきたものです。したがつて今月末に予定される学生大会では、医学部学生自治会は、どのような情勢分析にもとづいてどのような方針を活動にするかという基本的な問題が討議され決定されねばなりません。

3日の自治委員会は、国際、国内情勢について、委員長提出の案と、それへの対策が提出され、活発な討論が行われまし

西園をかんたんに比較すれば、委員長兼二重代表主義、とくに米茨、西園の動向、ボロール政権下のフランスを日本の場合と対比させ、ボロールの登場を許した民主主義の弱さを強調、対策として世界内本規模での冷戦政策の探求、社会主義世界体制の発展、植民地諸国の民族解放斗争、資本主義国内をばじの全世界人民の平和のための斗争の提議を特筆としてあげた。

国内情勢では、前首相が日本三南の動向と池田内閣の政策に注目し、池田内閣打倒を基本的な方針としているのに対し、後者は安撫斗争の成果を高く評価し、民主勢力内訌の弱点を克服する方向で、新安保不承認一放棄へと運動をすすめることを主張し、同時に、とくに総選挙へむけて池田内閣の本質を暴露することが必要だとしています。この両者の相違は、現在の学生運動内訌の“分裂”を反映したものにほかなりません。私達はこの“分裂”を、傍観するのではなく、主体的に受けとめ、本質をかみぎ

—— 系属 講 義 記 ——

▲ことしの初め、講義委員会は、「末朋会ニユース」のために次のような奇画をたてた。実行回数5回。講義及び発行は、各学年の講義委員が当番でこれにあたる。各学年に自由な企画を認めることにしよう。ホ3号(ホノ号は去年)たるべくして、ホ2号なる色を貸わされたこの新聞は、三年生の担当に任ずるものである。▲取ることをよく検討されて来、そしてまだまだ終止の想はれどもない私たちの課題—迎撃はどう生きるべきか—のために、私たちは現実の場から問題を提起したいと考えた。台詞集習のために多くの版面を費したのはそのためである。集習に参加した人だけでなく末朋会のすべての会員に、この中から考え

自身の成長を決定する必要性にせまられているのである。このように、学生大会では、これら講義分科、基本方針ととちて、学生運動をめぐっての討論が予定されていきます。『分裂』の真の原動力は何か—情勢を一面から、民主勢力の取北あるいは撤退としていかとらえず、運動のすゝめ方においても、学生のエネルギ—を最大限に結集するより、はむしろ少敷精銳、冒険主義をとり、防犯首を中心とした平和と民主主義を守る全国民戦線の中に学生層を位置づけることをせず、かえって、統一戦線を非難しつづけてきた、現全等運指導部の方針に『分裂』の責任がなせいといえるでしょうか。

(睡 窟)

いずれ自治委員会原案がでさ上つて、クラス討論に付されることと想います。ひとりの人がほんとうに真剣に考え、率直に意見を述べ、あつて、自治会結成の発展のために努力しようではありませんか。

るべき事柄、のばすべき勇気が取つていただきたい。それが講義したものの原動力である。▲「末朋会ニユース」という題名、臨分気になりつつも、内容の方はおまじいなく作つてしまつた。というのが実情。realの定義はさまざまなのかも知れないが、卒業生と在校生と先生をつないでいる唯一最大の「さす」が、担着書学の確立と発展にあるとすれば、「末朋会ニユース」はニユースなる名を放棄してよいのではないだろうか。私たちはそんな気がした。▲すべては、この印刷物の、あり方に関連する問題である。規模、形態、内容に關しても多くの考えが取りだつた。これらのことへの解を、ホ3号以下を担当する方々にお願ひする。

四年生の発言

(文・長島彰子)

「4年生はよく文句を云う奴等だね。」
「私達の文句は何も不満のための不満ではないのです。総合実習の意義を認め、どうせするならば内容の豊富な充実感のあるものにしたいたいのです。実習に付する感想は4年生個々の持つ違い、入ったグループの違いによって十人十色でありましようし、満足してしまえば、よかつたと思われる事も多く、感謝の気持ちも深いのです。しかし人間は不満を持つ事により進歩するものと信じ、共通の問題点を拾ってみます。」

◎連続しての実習やレポートにござかバテ気味だ、たため、それらを片付ける事に日々のエネルギーが消費された。◎4年のこの時期は自分の学向の分野でいけば自分の自覚する時にあたり、量よりも質的な向上がほしかつた。◎反省のあり方に付する実習関係者の考え方がわかり合えていない。従つてグループによる実習の差が「ありすぎた。実習目標の受取り方がまちまちであつた。◎4年生は看護技術をマスターしているわけがなく、その臭いも4年生の指導をしたり、又3年生の手のまわらない部分の責任をとるのは負担ではなかつたか。◎4年生の興味は主に病状診察治療にあつた。病気の人の知識が深まつてこそよい管理がなされる筈だが、看護の人がそんな事を勉強して何になるという考えにすぎあつた場合がある。◎検討会がいつとも3・4年一語だつたがやや無理があつたのではないか。◎レポート、症例研究発表が時間的制約もあり実習そのものを害している場合があつた。◎朝の解説は実習に直接結びついたものであつてほしい。◎グループを作つた以上各メンバーの特長を生かし、仕事の分担をして獨特のチーム活動が出来たいだろうか。良かつた点をあげれば、◎非常に熱心に指導して下さつた先生が多かつたこと。◎先生によつては学生の為に処置の時間を調整したり、意図的に処置の実習を計画して下さつた事。◎看護に關し、すべてをまかせられ、仕事をばじのから終わり迄自分達の手段でやれたこと。◎色々な立場の人間と共同実習しその考え方にふれられた事。◎4年生には勉強の成果と不足とを同時に知らされた事。文句を言ひすぎたの感想として、
「文句を云う資格のある実力を持たなければねえ……」最後に思ひますことは、先生方と学生が充分ふれあつて生まれて来るものであればお互に建設的になり不満を解消されて行くだろうということです。